



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	食の透視画法(8) : 食物を「与える=与えられる関係」(中)
Author(s)	高井, 哲彦
Citation	しゃりぱり, (225), 56-57
Issue Date	2000-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52872
Type	article
File Information	charivari225_56.pdf



食の透視画法⑧

食物を「与える＝与えられる」関係(中)



高井哲彦 北海道大学大学院経済学研究科助教授
同大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター研究員

路上は社会観察の勝手口

路上での買い食いが好きである。

パリの焼き栗、東京・井の頭公園の焼き鳥、ロンドンのハンバーグステーキ、香港の肉饅、札幌ススキノ揚げジャガイモ、プラハやビールのフェルトの焼きソーセージ、イスタンブールのムール貝詰め炊き込みご飯、リスボンの焼きイワシ、ソウルのボンテギ、ニューヨークのプニッツェル。

同じパリ市内でも、北部アラブ人街なら激辛ケバブ、中央ユダヤ人街ならアラフェル、南部中華街ならヴェトナムサンドイッチは見逃せない。

カルカッタのバザールで錆びた絞り器からサトウキビ汁を飲んで回ったときは、帰国後の下痢でランブル鞭毛虫が発見され、伝染病専門医院の隔離病棟に検査入院させられたのだが、まだ懲りない。

とくに買うつもりがなくても、屋台に目が留まったときに不意に思いついて買って、そのまま手に抱えて歩き続けるという気軽な開放感が良い。

路上を好きなほうが、1992年にパリ留学を始めたとき、まず買っ

たのは赤い小型の市街地図と赤い中古自転車だった。地下鉄網が機能的に発達した街で、自転車走行はむしろ危険なくらいだったが、地下に潜って街を見ないのもつたいたいと思っただ。

大学・図書館・古文書館に通うときも、行きと帰りで同じ街路を通らないようにして、学生街も商店街も覚えた。

人が行き交う繁華街で足元に目を落とすと、「華のパリ」の路上では実は、物乞いをする人々がたくさんいた。高齢者やロマ族（ジプシー）の物乞いは昔からいたそうだが、ジーンズをはいた20〜30代の男女もいる。ほぼ同世代で他人事とは思えない。

この時期、ヨーロッパは長期失業という新現象に悩んでいて、フランスの失業率は13%にも達していた。この統計には、北アフリカ移民2世にとくに典型的とされる、中学校等を卒業したまま一度も職につけなかった若者は、「失業」とは計算されていない。そのため、問題は数字以上に深刻だ。

パリ地下鉄網の「へそ」に位置するシャトレは、東京新宿・歌舞伎町にも比すべきパリの雑駁な商業・文

化・交通の中心地であるが、その活発な消費活動の裏側で、週の定められた日にはパリ中からホームレスが集まる拠点ともなることは、パリジャンにも案外知られていない。巨大商業モールの東端にあるサン・ユースターシュ教会で、慈善スーパが振る舞われるのである。

大阪の釜ヶ崎や東京の山谷で参加した寄せ場労働者への炊き出しを思い出したが、不況下パリのホームレスには、労働能力のあり余る若者であっても労働の機会はなく、その意味では別の意味でより過酷であるともいえるかもしれない。

「ホームレス」と書いたダンボール札を立てて商店街の地べたに寝そべる彼らを、警察が取り締まって追い立てていくのを度々目にした。日本の数倍は犬が多いフランスでは、ホームレスも、シェパード系の大型雑種犬を横にかしずかせていることが多い。その主従の風景は微笑ましく、ややホッとした思いになったのだが、後でそれは、警察官が署内での犬の繋留を煩わしがって留置所への連行をためらいがちになるという、切実な戦略の意味も含んでいると知った。

ストリートペーパーと ホームレスの結合

1993年夏から突然、路上や地下鉄で声を張り上げ新聞を売り始める人々が現れた。Le MondeやLe Figaroのような権威ある新聞ではなく、ストリートペーパー、ホームレス新聞というべき新しい存在だ。ホームレスの人々が10フラン（20円）で売り歩き、そのうち3フラン分を編集部が発行実費として払い、7フラン（14円）分を自分の収入にする。この年のパリは、このストリートペーパーが百花繚乱に創刊され、街路や地下鉄網に賑やかな活気を与えるようになった。

おそらくパリではじめての発刊は、1993年夏創刊の隔週Le Reverbere（街灯）だろう。少なくとも1993年中は多分もつとも販売数が多く、1996年頃の74号までは発行を確認している。

ベルギー系の月刊Macadam Journalも、あちこちの地下鉄・街角で見かけ始めた（Macadamは碎石をローラーで固めた舗装路のこと）。1993年春ブリュッセルで創刊されると、同じ秋にはフランス会社を設立し、スイスを含めた仏語圏3国

で販売された。1994～1995年からMacadan Infoと改称したが、2000年現在も街頭で見かけた。

月刊La Rue（街路）は、1993年10月、イギリスのThe Big Issue（大論点／大発行）の支援で創刊された正統派。15フランと高めの値段設定で、新聞というよりホチキス綴じの雑誌スタイル。突っ込んだ長文記事売りにして、類誌の中でもっとも格調高い。やや硬すぎるのか学生街周辺以外ではあまり見かけなかったが、1997年7月の42号まで確認。

1994年頃には、地方月刊紙Sans Abri（ホームレス）も創刊され、フランス南東部ヌーシ近郊に編集部を置き、1997年1月には32号にも達していた。

隔週Le Lampadaire（街灯）は、日付を入れていないため不透明な後発新聞の印象だが、号数から逆算すると1993～1994年頃創刊。1997年頃の90号にはL'Intrant（巡回者）と改称し、2000年現在も粘り強く発行を続けている。

図抜けてファッショナブルなカラービジュアル紙、月刊Faim de siècle（時代の渴望／世紀末）は1993年冬に創刊されるが、利益をピンは

ねしているという商業主義批判もあって紆余曲折し、1996年2月以降は未確認。

1995年頃にはL'Impasse（袋小路）が創刊され、1996年2月には、日本の『びあ』に似たイベント情報誌スタイルの月刊Spectacles d'Ile de France（パリ圏のイベント）が創刊されたが、これらのように長続きしない新聞もあったようだ。

ストリートペーパーを介した人々とホームレスの関係は、もはや慈善の食物を乞い〓与える関係ではない。

ホームレスは、働き手として新聞を売り、読者は報酬として代金を支払う。ホームレスにとっては物乞いでなく自活であり、接する者にとつては上からの喜捨ではなく対等の交換関係である。

釜ヶ崎での食の炊き出し経験以来、与える〓与えられる関係構造に気まずいひつかりを感じていた自分にとつて、大きな転回点を前に目が開かれる思いがした。

■高井哲彦氏

1966年生まれ。1990年度慶応義塾大学経済学部卒業。仏政府給費留学生を経て、1999年国立パリ社会科学高等研究員博士課程修了。同年より現職。専門分野は西洋経済史、経営史、社会史。